



The man of action stage

[実行舞台]

いざという時は京都人もやる
ただキツカケのリードが必要

前原 ホスト役なんて初めてで、いじめ
て下さい(笑)

堀場 限界を試してみましようか(笑)

前原 今年はバールサンガの開幕戦が、
堀場 3対2で勝ちました。開幕戦にはあ
まり今まで良いイメージがなかったので
(注：Jリーグでの開幕戦勝利は97年以来)
(笑)。後援会の会長をさせてもらって
ますが、あれって、僕たちの母校の附属に
関係しているんですよ(注：京都教育大学
附属京都中学校)。

前原 紫光クラブですよ。僕たちの大先

政治家の立場を脱ぎ捨て、裸の真摯ないち社会人として、
京都に対する熱き想いを語る、
前原誠司をホストに迎えたコーナー。
京都に迷いを与えるのではなく、
「京都をこうする！ 自らが成す」を合い言葉に、
各界のオーソリティと齒に衣着せぬ対談を敢行。

HORIBA ATSUSHI

MAEHARA SEIJI

堀場 厚 × 前原誠司

堀場 小学校からサッカーは強かった。
堀場 私も小学校の頃からサッカーをして
ましたから。
前原 そういうご関係なんですね。
堀場 後援会が発足して10年になります。
色々ありましたけれども今は後援会理事の
メンバーもチームワーク良く熱心によつて
くれています。毎月1回は集まって理事会
をして。マンオブザマッチに選ばれた選手
にはホームの勝試合では賞金を出して。去
年は予算が余ったとか、今年は足りなさそ
うだとか(笑)
前原 サポーターには自由にやっておられ
る方も組織化された方もあって、また別に
後援会があると。

堀場 (Jリーグ加入に際し) 25万人の署名があつて、せつかく京セラさんという大スポンサーもついたけれども、ボタンの掛け違いみたいなものが当初はあつたわけですね。ただ、それに対してアブリシエーションは持つべきやと思う。「ビッグフラッグ(客席を埋める25m×25mの巨大なチーム旗)」も後援会がリーダーシップをとり、メンバーがスタジアムで募金活動をした。400万円近く集まったのかな。他の地方と違って「燃え上がらない」と言われますが、いざとなると京都の人もやることはやるんですね。ただキツカケについてはリードしないといけませんけど。

後援会長がサンガ監督にメールで采配について言及?

前原 敢えて聞きにくいことを伺いますが、応援をするからには強くあつて欲しい。天皇杯の優勝は一度ありましたが、今はJ2で、もっと強くなつてくれないかと京都市民や府民は応援しないのではないかと。後援会長としてチーム、あるいは経営陣に対して発言できる立場でらっしゃると思うんですが?

堀場 最初の4~5年はチームとの連携が難しかったですね。今はチームとファンを繋ぐインターネットフェイス役になつてると思います。最近では監督と直接メールができるようになつたんですよ。

前原 後援会長と監督が、采配についてとか? (笑)

堀場 いやいや(笑)。試合とか選手がどうのというのは、僕の考えでは後援会が言うことではないと思うんで、ただアワードパーティに来たくないなんていう選手には「来んでもいい」と、こういうピシツと言え人間は日本には少ないと思うのでね。

前原 「チームの顔」というのが固定しませんよね? 黒部にしろ、林智星にしろ、まあ移籍は当たり前という文化ですから致し方ない部分もあるのでしょうか?。生え抜きというか、「パールサンガの顔」という選手が定着しないのが、腰を落ち着け

て応援できないひとつの要因ではないかと。

堀場 おっしゃるとおり。問題は後進を育成していくシステムが力不足ということ。ユースも含めて下部組織から育成するという流れがないと。だから柱谷監督に期待するわけで、それは「京都出身」ということではなくて「京都に対する思い」という部分にね。

前原 今度はフォロワーする話になります。山科経済同友会」というのがありまして、毎年山科・醍醐に少年サッカーチー



ムが8チームくらいあるでしょうか、その大会の時には必ずパールサンガの選手が来て、教えて下さるんですね。プロ選手に教えてもらう喜びは子供たちにとっては非常に大きなものだと思いますし、そういう地に足の着いたというか、地元に根ざした活動が定着すればまた違った展開になつていくと思うんですが。

堀場 女子サッカーフェスティバルというのも京都モリーニングロータリークラブでやつてるんですが、去年も100人近くの参加選手がサンガの普及部の指導を受けていましたね。それで今年は一気に参加者が増えました。普及部の地道な活動は重要で

し、着実に潜在的に「強いファン」というのは増えていると思います。

料理もサッカーの試合も一流を目指すなら一流の器を

前原 今、主に野球界ですが、様々な地域での取り組みがありますよね。四国の独立リーグであつたりとか、合併・身売り、オーナー企業が変動していく中で、プロフットボールチームの在り方が問われています。「京都に愛されるチーム」のために何が必要なのでしょう。

堀場 立场上非常に微妙なところなんです。チームという会社を健全に経営する、ビジネスとして成功させることは非常に難しい。野球のように試合数があるわけではないし、もともと集金能力としては弱いんですね。そもそも「百年構想」です。100年かかるでしょう。ただ川淵チェアマン(注: Jリーグ発足当時。現キャプテン)日本サッカー協会会長)は素晴らしいリーダーシップをとられましたね。野球界にああいう人が出てくれば、野球なら採算が合うと思う。

前原 このコーナーのテーマである「どうする?」ではなく「こうする」という部分。サンガの為に「こうする」というのは? 自身に出来ること、という意味で、願掛けに近いようなものでも、言えれば自身を縛り付けることになるかもしれない(笑)。

堀場 今年もJ1に上がれなくて、後援会が主催するアワードパーティに300人、400人集まるか?。集まらなくて赤字になつても責任者でカバリーしないといけないんですよ(笑)。でも「やろう」と。チームが落ち込んでるときその後援会でね。良いときは僕らがやらなくても、市民の方々がサポーターがやってくれるんだから。

前原 そうですよ。私もいち後援会員として参加させていただいたときにおっしゃつてましたもんね。その後に稲盛名誉会長が選手を叱責された。あのお二人の絶妙のコンビネーションは素晴らしい。あれが選

手にモチベーションを与えているんだなと。アメと鞭の「アメ担当」(笑)。

堀場 甘いですからね(笑)。

前原 最後は、何の話題で笑つて終わりますよ。リーダーを見れば解るとはよく言つたもので、あれで上がればなければ仕方がないと思えますから。

前原 あと球技場の件は?

堀場 そうそう。例えば、コストの面を考えるとこの料理(撮影中に供された料理)をプラスチックの皿に盛つて出しても構わないわけですよ。なぜこういう器で出すのか? やはり一流のものは器も一流でないといけません。サッカーも同じで一流の器は必須です。ですからスタジアムはせむじも欲しい。西京極は市のものですから、沿道に店も出せないし、旗すら立てられない。盛り上がりがない訳ですよ。サッカーは格闘技ですから、足と足がぶつかつて、スタンドにはばんばんボールが飛んでくる。そういう迫力を感じるのにあの400mのトラックは必要ない。だんだん笑えなくなつてきました(笑)。

前原 球技場(料理の器)にまだお料理が残つてますから(笑)。

堀場 試合終了までいただいて帰りますよ(笑)。

編集後記

様子見の特性を持つ京都風土にも、そろそろヤル時はヤル意識の風を起す季節が来ているように、一流の劇場都市を創出した先人に習うべく、まず一流のスポーツの舞台、器を、新種を一流に育苗するシステムを、愛する京都から発信して行くに我々は今日何が出来るだろう。私はホーム試合観戦からはじめよう。(本誌プロデューサー・五所光一郎)



取材場所に使わせていただいたのは「和ダイニング さらら」(075-254-7545)。次々と供される料理に舌鼓を打ちながらの対談となり、運酒に盛られた料理と器がスタジアムの話に華を添えた

Host
前原誠司 まえはら・せいじ

62年4月30日生まれ。京都教育大学教育学部附属京都中学~高等学校卒業。京都大学法学部卒業。平成5年7月、第40回衆議院議員総選挙で初当選。現在4期目となる衆議院議員。旧来の政治運動や票集めの方法を潔しとせず、いち社会人として「本当に京都を良くしたい」という想いが本誌のコンセプトとシンクロし、当コーナーのホスト役が実現した。多忙な日々を合間を縫って自ら街に出て、街の声を聞き、立場を越えた考えを発信する。
<http://www.maehara21.com>

Guest
堀場 厚 ほりば・あつし

48年生まれ。甲南大学理学部卒業。米国の関連会社出向、カリフォルニア大学大学院(電子工学)留学などを経て、本誌の裏表紙でお馴染みの株式会社 堀場製作所入社。92年より代表取締役社長。数々の肩書を持つが、今回は「京都パールサンガ後援会長」として京都のプロスポーツについての意見を中心に発言。取材協力いただいた「和ダイニング さらら」は、本誌を読んで「行ってみよう」と思ったところだった」という。
<http://www.horiba.co.jp>